

告 辞

本日、東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程を修了し、晴れて博士号を授与される皆さん、おめでとうございます。本学教職員一同を代表し、心よりお祝い申し上げます。

本年は、生物生産科学専攻1名、応用生命科学専攻4名、環境資源共生科学専攻9名、農業環境工学専攻3名、農林共生社会科学専攻1名、論文博士3名、計38名の皆さんが、この学び舎から巣立っていくこととなりました。この3年間、皆さんはさまざまな経験をされたと思います。学士課程、そして大学院修士課程を終えて、さらに深く厳しい研究の道に足を踏み入れたわけですから、楽しいばかりでなく、挫折や困難を乗り越え研鑽と努力を重ねる厳しい日々でもあったでしょう。今、皆さんの胸中は、きっと晴れ晴れとした達成感、そして未来への期待で溢れていると思います。しかしここで今一度、皆さんが学業に励んできた間皆さんを支えて下さったご家族、ご友人、関係者の方々に対する感謝の気持ちを思い起こして下さい。皆さんが今日この日を無事に迎えることができたのは、こうした方々の有形無形の支えがあったからこそです。我々教職員一同もその暖かいご支援に心からの謝意と敬意を表しつつ、この晴れの日の喜びを共に分かち合いたいと思います。

本日は皆さんの人生の区切りとなる日ですが、この場を借りて、本学でのたくさんの思い出と共に記憶にとどめておいていただきたい言葉をお伝えします。それは『知行合一』という言葉です。『知』すなわち知ること＝知識は、『行』すなわち行うこと＝行為と一体である、つまり知識と行動は互いに伴っているべきであるという意味で、中国の王陽明が唱えた有名

な命題です。同様の意味を伝える言葉は各国各世代にあり、日本では貝原益軒が『知って行わざるは知らざると同じ』と言い、かの文豪ゲーテも『知ることだけでは十分ではなく、それを応用させなくてはならない。』と残しています。学問をして得た知識はそれを活かして実践してこそ意味があり、実践して形にしなければその知識は無用の長物とまでは言わなくとも机上の空論、無駄なものになってしまうかもしれません。皆さんがこの大学で学んだこと、学術研究だけでなく意識や姿勢、人間関係などすべては、もちろん皆さんの努力の賜物で財産となるものですが、財産を蓄えたというだけで終わらせてはいけません。特に皆さんが専攻した農学分野は、環境・資源・食糧のいずれの側面から見ても、人類の健康的な存続に最も直接的に係わる学問分野です。皆さんはこの連合農学研究科で特色である柔軟で先駆的な精神を受け継ぎながら最先端の農学研究を学んできました。これからはここで得たその知識、財産を実際に活用し、人類が抱えるさまざまな危機を救い自然と調和した持続発展可能な社会の創造に益となるような形で還元し貢献していかなくてはなりません。その精神こそ本学創基以来貫く基本理念であり、科学技術に携わるすべての者の今も昔も変わらぬ使命なのです。どのような道を進むにせよ、今日この瞬間から、皆さんは社会人として、研究者として、どう生きていくかを問われることになります。そしてきっと今、皆さんは自分たちの持っている知識や技術で社会の役に立ちたいと、将来の夢や希望、意欲に胸を膨らませていることでしょう。ゲーテは先程の言葉に次いでこうも言っています。『やろうという意志だけでは十分ではなく、実行しなくてはならない。』と。今の気持ちを気持ちだけで終わらせず、実行に移し、困難にあっても自信を持って突き進み、世界を牽引して活躍して下され。そして本日ここにいる38名の皆さんは、これからお互いの人生の良き仲間、共に困難に立ち向かうパートナーとなり、切磋琢磨するライバルとなる人たちです。この大学で培った関係を長く暖め、大事にしていきたいと思えます。

次に皆さんにお会いする時には、さらに成長した頼もしい姿を見ることができると期待しています。そして本学も皆さんの母校として誇れる心強い基柱となるよう、またいつでも皆さんのお手伝いが最高の形で出来るよう、さまざまな挑戦的取り組みやグローバル・イノベーションを推進して、世界の役に立ち世界に認知される実力ある大学づくりに一層の努力をしてまいります。これからも同窓会活動やそれぞれの仕事を通して互いの交流が有意義に深まることを願い、そして最後にもう一度皆さんの今後のご健闘・ご活躍を心よりお祈りし、告辞とさせていただきます。

平成28年3月15日

東京農工大学長 松永 是